

『古代アメリカ』 1, 1998, pp.67-77

<研究ノート>

古典期マヤ文明2次センターの調査・修復・保存

—ホンジュラス、ラス・ピラス遺跡での活動を例として—¹⁾

中村誠一
(民族学振興会)

【キーワード】

古典期マヤ文明、2次センター、ラス・ピラス遺跡、遺跡の修復・保存
Classic Maya Civilization, Secondary Centers, Las Pilas Archaeological Site,
Restoration and Conservation of Archaeological Sites

1. はじめに

筆者は1983年より、中米ホンジュラス共和国の西部を中心として、マヤ文明の諸相に関する長期滞在型の現地調査・研究を行っている。筆者の調査地域であるホンジュラス共和国西部からグアテマラ共和国東部にかけての地域は、マヤ文明圏の南東部にあたり、従来グアテマラのペテン低地のようなマヤ文明「中核地帯」に対して、受動的・後進的な「周縁地帯」との位置付けをされてきた地域である。しかしながら、東南メソアメリカ全域におけるここ20数年間の学術調査の進展により、近年ではこの地域がマヤ文明全体の起源・発展・衰退・崩壊の各プロセスにおいて、重要な役割を演じていたことが明らかになってきている。

このマヤ地域南東部におけるマヤ文明のセンターとしては、古典期(紀元250～900/950年)のコパン(ホンジュラス)、キリグアー(グアテマラ)が有名であり、どちらもユネスコにより世界遺産に登録されている重要遺跡である。現在の筆者の調査・研究は、この両センターを主役としてマヤ地域南東部に盛衰した広域的なコパン地方国家 regional state の全体的な諸相を、特に王都とその周辺地域の間での政治的な相互関係を中心として、通時的に解明していくことにその大部分の努力が注がれている。もちろん、古典期マヤ文明の各センター間における政治組織の形態や政体規模等に関しては、マヤ研究者の間で広範な議論が行われており [Chase and Chase 1996; Demarest 1992; Houston 1993; Marcus 1993; Martin and Grube 1995; Mathews 1991; 猪俣、青山 1996 等参照]、その南東部を例にとっても、筆者が想定しているような「広域的な」コパン地方国家の存在が、すべてのマヤ研究者によって認められている訳ではない。筆者は現在のところ「広域的なコパン地方国家」という用語を、一部のマヤ研究者が regional state²⁾ の形態として想定しているような、安定した支配域と固定化した中央集権的政治階層をもつものとしては使用していない。この点は極めて

重要な問題であるが、本稿の主題とはかけ離れるため、別の機会にその検討を譲りたい。

さて筆者の想定に基づけば、古典期後期（およそ紀元 550/600 年～ 900/950 年）のマヤ地域南東部には、広域的な地方国家の中心部にあたる 1 次センター（王都コパン）と、それを緩やかに、また衛星的に取り巻く数多くの周辺部 2 次センターが形成されていた。そして、筆者の近年の調査・研究対象はこの周辺部 2 次センターに集中しており、その調査・研究過程において本稿のもう一つの主題である「遺跡の修復・保存」に関する諸問題が関連しているのである。そこで本稿では、まず現在筆者が行っている周辺部 2 次センター、ラス・ピラス遺跡における調査概要とこれまでの主要成果の紹介を行ってみたい。そして、後半部においては、周辺部 2 次センターの修復・保存に実際関与した経験から学んだ諸点を紹介・提起し、「古代アメリカ研究会」の将来活動への一つの提言としたい。

2. 古典期マヤ文明の 2 次センター：ラス・ピラス遺跡

筆者は現在のところ、ラス・ピラス遺跡が古典期後期の大部分において、広域的なコパン地方国家を緩やかに形成していた衛星的 2 次センターの一つであったと考えている。「2 次センター」とは、マーカスらによって 1970 年代に使用されて以来 [Marcus 1973; 1976 etc.]、マヤ研究者の間で慣習的に用いられている用語で、マヤ地域南東部においては近隣の王都コパンを「1 次センター」と定義した時のセンター間の政治経済的な階層性を仮定した用語である。

この遺跡は、ラ・エントラーダ地域を構成する西側の谷間である「フロリダ谷」の南西平野部、海拔約 460 メートルの地点に位置し、ラ・エントラーダ地域内では一番コパンに近い 2 次センターである。現在この遺跡は、トウモロコシ、フリホーレス、タバコといった作物栽培や放牧に利用されている 4 つの私有地にまたがって存在している。遺跡全体は、この地域の主要河川・チャメレコン川の支流であるオブラヘ川に沿って 1 キロ以上にわたって散在する 200 基ほどのマウンド群として登録されているが、往時は周辺の中・小遺跡を包括し、かなり広範な支配域を有した大規模なセンターであったと想定される。この遺跡は、その規模にもかかわらず、今世紀前半にラ・エントラーダ地域の踏査を行なったロウスラップ、イーデ、モーレイらによってもマヤ学界に報告されておらず、1984 年にラ・エントラーダ考古学プロジェクトによって初めて発見・報告された。そして、1987 年から 89 年にかけて 1 平方キロ近くをカバーする遺跡全体の平面図作製や試掘調査が行われた [Nakamura et al. 1985, 1991]。その結果、先古典期中期から古典期終末期までの居住（紀元前 900 年頃～紀元後 900/950 年）が示唆されるとともに、コパン周縁部の 2 次センターとしてはロス・イゴス（ラ・ベンタ谷）、リオ・アマリージョ（リオ・アマリージョ谷）とともに石に刻まれた碑文断片が確認された。それには、マヤ文字研究家によりラス・ピラスの紋章文字である可能性が指摘されている文字や、マヤ碑文において戦争の主題表現に重要と思われる「ボロン・パキ（9 つの骨、9 人の捕虜の意味）」と読まれる文字が含まれていた [Nakamura 1996:80-84,209; Schele 1989:211; Stuart 1985:97-98; スチュアートからの私信、1991,1995]。さらにラス・ピラスは、コパンとラ・エントラーダ地域を結ぶ推定交易路の要所に位置しており、この遺跡の調査は古典期マヤ文明 2 次センターの起源や性格ばかりではなく、古典期マヤ政体全般の政治組織の形態や規模の解明という普遍的な研究課題の解明に大きく貢献しうると期待されている³⁾。

3. ラス・ピラス遺跡の調査と予備的成果

通算2期にわたったラ・エントラダ考古学プロジェクト（1984～1994）の後を受けて、筆者は1995年から、日本の様々な民間財団の御支援により、ラス・ピラス遺跡の調査・修復事業を行っている。上述したように、この遺跡における筆者の調査目的は、広域的なコパン地方国家を形成していたと想定される衛星的2次センターの調査を通して、古典期マヤ文明の政治組織の形態や規模に関する議論に新たな資料と解釈を提出するとともに、周縁部における2次センターが、いつ、どのようにして成立し、地方国家全体の発展や衰退にどのような役割を演じたのか、という点を考察することにある。

1995年以降現在までの3シーズンに、ラス・ピラス遺跡で行われている調査は、調査区域、取り扱っている時代ともに広範なものであるが⁴⁾、これまでの調査によって、ラス・ピラスにおける居住の起源は先古典期中期（紀元前900年頃か?）まで遡り、少なくとも1回の衰退・放棄の時期を経て、断続的に古典期終末期（紀元850年～950年頃）まで居住が存続したことが明らかになっている。この結果は、ラ・エントラダ考古学プロジェクト第1フェーズで指摘された先古典期後期における地域の衰退仮説を支持するとともに、マヤ文明研究全体の観点からは、デマレストらによって提唱されている異なったマヤ・センター間の「脈動的な」盛衰パターンの存在を傍証するものでもある [Demarest 1992]。さらに、中心グループの主要建造物のもとの起源は、エル・プエンテ遺跡と同じように、おそらく紀元6世紀に石を含まない版築された粘土層をコアとして建設されたこと、この時期にはコパン特有の精製土器が数多く出現していること、この遺跡が地方センターとして確立・発展した古典期後期後半には、碑文だけではなく、ミニ・コパンといえるほど数多くのモザイク状石造彫刻によって中心グループの建造物が飾られていたこと、が明らかになっている。特に古典期後期の時代に属する建造物2番では、3時期にまたがる建築段階（フェーズ）の確認とそれぞれの段階の建造物の基壇規模の確認、最終居住段階の建物とそれを飾っていた石造彫刻類の回収等がなされている。現在まで、建造物2番における平面発掘調査により確認・回収されているモザイク状石造彫刻は700点を超えている⁵⁾。

すでに別稿で報告されているように [中村 1996(4):26-28, 1997:166-168]、建造物2番の最終居住段階の上部構造（建物）は、それぞれベンチを伴う3つの部屋を有しており、南の部屋の背後では、建物のフリーズを装飾していた石造彫刻群が崩壊した状態のまま発掘された。こういった状態で石彫がまとまって出土するためには、偶然的要素が大きく左右し、これは極めて珍しい出土例であるといえる。近隣のコパンでも、こういった事例はあまり報告されていない。この地点ほど集中してはいないが、同じモチーフを有する石造彫刻群は同建造物周辺全体に数多く確認されており、コパンの事例を参考にすれば、それぞれの部屋上部のフリーズにも前後各1体ずつ合計6体の人物像が飾られていたと筆者は想定している。暫定的に組み立てられた南の部屋背後の人物像に関する予備的解釈に関してはすでに報告したので [中村 1997:166-168]、本稿ではその他の点に関して補足したい。

1996年度からラス・ピラスの調査に参加している杓谷茂樹は、バーバラ・ファッシュが人物像上部の装飾の一部と同定した石彫の中に文字を確認したが、この文字はトンプソンのカタログにおいて、T535,536と分類された文字「装飾されたアハウ」の異形であると筆者には思われる [Thompson 1962:150-151]。ウィリアム・ファッシュは、この文字は「血縁、親族」を意味すると筆

者に示唆したが[私信、1996]、この見解は、T535の文字が、マヤ碑文においては「ニチン nichin」という読み(音)を与えられ「誰々(男)～の子供」を意味すると解説した碑文研究家の見解に基づくと思われる[Coe 1992:214-215; Houston 1989:52]。例えば、コパンの石碑9の側面碑文においては、この文字は10代目の王である「ツイク・パラム(月ジャガー)」が、7代目の王である「パラム・ナン」の子供であることを示すと思われる文脈で使用されている。もし、ラス・ピラスの石彫に確認されたこの単独の文字にこのような解釈が適用できるのであれば、それは「親子関係」を表わす意味だと想定できる。しかし、これらは碑文の文脈の中で同定されたものであり、単独で生じ脈絡を離れたラス・ピラスの場合もそのまま当てはまるかどうかは定かではない。

一方、シーリによれば、この文字は「フン Jun」とも読まれ「頭飾り」を意味している[Schele and Looper 1996:7, 33-34 etc.]。筆者には、ラス・ピラスの事例にはこの解釈のほうがふさわしいと思われる。この解釈を採用すれば、この文字が入った石彫は、まさに頭飾りの一部と考えられる。しかしもっと重要な点は、この文字をもつ頭飾りをつけた人物が支配者を表すという点である[Schele and Looper 1996:64]。確かに、キリグアーの石碑においても、モニュメント26に彫られた初期の支配者の頭飾りにこの文字が組み込まれている[Sharer 1990:73-74 参照]。ラス・ピラスでは、この文字が刻まれた当該石彫は上述した一括石彫群と関連した地点で発掘されているので、この頭飾りは復元された人物像につくものと筆者は考えている。以上は、この石彫に関するバーバラ・ファーシュの部位同定が正確であったことを示すと同時に、少なくとも建造物2番にはめ込まれていた人物図像の中には、この遺跡の支配者ないしは支配者の息子(継承支配者)の図像があったことを示唆しているのである[中村 1997:168]。

さらにこれらの人物像の下部には、カウアックの要素をもつモンスター石彫が、少なくともいくつかの人物像に伴って建物にはめ込まれていたと推定される。図像を構成する各パーツだけを考慮し、必ずしも出土地点に基づかない組み立て実験は、バーバラ・ファーシュによって96年に行なわれ、1例が暫定的に組み立てられている[Nakamura 1996:写真2-b 参照]。現在、モンスター像を構成する各パーツの出土地点の詳細な分析を行ないつつあるが、現時点ではその数やはめ込まれていた正確な場所に関しては予測できない。このモンスター図像が何を示しているのかについても研究中であるが、コパンの建造物22の事例や、95年に発見され97年に組み立てられたリオ・アマリージョの事例との比較から「ウィッツ・モンスター」ではないかと我々は推測している。

ラス・ピラスのこれまでの調査で得られている上述したような資料は、ヤシュ・パサフの時代には、周縁部2次センターの支配者と思われる人物も自分たちの家をモザイク状石造彫刻類によって王都の居住区のように飾っていたことを明らかにしたばかりではなく、当時の王都コパンと周縁部2次センターの政治的な相互関係を考察する上で、極めて重要な図像上の比較研究資料を提供しているといえる。こういった点をもつ意味の検討に関しては、本稿の射程から離れるため別稿に譲りたい。またラス・ピラス遺跡は、上述したようなコパン王都との密接な関係を想定できる一方で、

- 1) この遺跡の中心グループの設計(Site Plan)は、コパンやキリグアーとは異なったエリート文化が想定されているグアテマラ・モタグア谷下流域固有の、「モタグア・クアドラングル」というアイデアを踏襲している点[Nakamura 1996:81; Schortman and Nakamura 1991]、
- 2) 建造物2番の最終居住段階の設計においても、コパンとは異なった独自性が発揮されていると思われる点[中村 1997]、
- 3) ラ・エントラーダ地域内の諸センターの中では、中心グループの遺跡規模が一番小さいと想定されていた一方で[Nakamura et. al 1991:Cuadro VIII-1～5; 猪俣、青山 1996:表1]、碑文断片や多

量の石彫に示唆されているように高い政治的地位を有していたと思われる点、などの見た目の背反性が注目される。このような点の解明も今後の課題である。

4. ラス・ピラス遺跡の調査に伴う修復・保存上の諸問題

古典期マヤ文明を代表する都市センターの一つである近隣の世界遺産コパンと比べると、極めて小規模な周辺部2次センターを修復・保存し、一般公開しようとする事業はどのような意義をもつのであろうか？ その調査・研究上の偏向と同じく、これまでマヤ地域で修復・保存され一般公開されているセンターは、そのほとんどが大規模な1次センターであった。しかしながら、近年この偏向を是正しようとする動きが出てきている。南東部を例にとると、コパンやキリグアーだけではなく、すでにコパン谷内においては、王都であり歴代の王の居住区であるコパン遺跡中心グループの他にも、「ラス・セプトゥーラス」という従属エリート層の居住区が修復され一般公開されている。これに加えて、エル・プエンテ、ラス・ピラスといった周辺部2次センターが修復・保存され一般公開されることにより、遺跡を訪れる人々は周回的な観光ルートにのって、1次センターとそれを取り巻く2次センターというコパン地方国家の全体像を把握することが可能になり、しばしば大センターだけを見て形成されるマヤ文明観の補正に大きな役割を果たすことができると思われる。こういった事業は、観光振興を通して経済開発を図ろうとする開発途上国政府側の意向にも沿うものであるし、地域固有の資源であるマヤ文明遺跡に立脚した新たな地域開発という観点からも好ましいものである。また保存された遺跡は、野外歴史教育や学術研究にとっても格好の場となりうる。したがって、ラス・ピラス遺跡のような周辺部2次センターにおいては、その調査意義だけではなく、その修復・保存意義も極めて高いものがあると考えられる。筆者はこのような観点から、今後も周辺部2次センターの調査・修復・保存事業に関わっていきたく切望している。

さて、具体的な修復・保存に関しては、どのような問題点があるのであろうか？ ラス・ピラス遺跡のような低地南東部のマヤ遺跡は、発掘前の状態においてはマウンド状態をなしており、実際の発掘は表土とそれを剥がしたときに出現する上部構造の崩壊した崩れ石群を退けながら、まずはその建造物の最終居住段階を露出することに始まる。この最終居住段階の建造物を精査することにより、往時の建築の姿や放棄時の様相・原因等に関する重要な手がかりが得られる場合がある。しかしながら、最終居住段階の建造物の調査だけでは明らかにならない別の問題点、すなわち、その建造物の前の居住段階の確認、建造物のもともとの起源や成立時期、その性格や他地域とのつながりといったような問題点を追及しようとしたときに、当該建造物をトレンチで切る調査が必要となり、ここに遺跡の修復と保存に関わる最初の難しい問題が出現すると筆者は考えている。もちろん、最終居住段階の建造物を平面的に発掘し全体的に露出させるだけでも、それまでとは全く異なった環境に建造物自体を置くことになるため、常に保存の問題は生ずる。しかし建造物を平面発掘して、その最終居住段階を露出するだけであれば、当該建造物の「破壊」にはならず、それらの建物や壁面の記録後、それらを補強し、また埋め戻すことも可能であり「調査する考古学者の責任」という観点から見ても、問題はないと考えられる⁶⁾。しかし現実には、我々マヤ考古学者は埋蔵建造物を露出させるばかりではなく、それらをトレンチで切る調査を行っているのであり、この点でその目的と方法、調査後の処理の仕方は、十分に後世の批判に耐えうるようなものでなければならないのではなかろうか。

筆者が、これまでラ・エントラダ地域における2次センターの修復・保存事業から学んだ事柄は、極めて多種多様にわたるが、その中には以下のような点が含まれている。

- 1) そもそも我々マヤ考古学者が、修復や保存を度外視して発掘調査を行ってもよいのか、という基本的な問題。
- 2) 調査とともに修復・保存することを決定したとしても、マヤ遺跡においては、しばしば最終居住段階の建造物よりも一つ前の段階の建造物のほうが保存状態が良好なことがあり、その際、どの建造段階の建物を修復・保存すべきなのか、といった問題。
- 3) トレンチで一つの建造物を切って調査を行っていく場合、いくつもの建造段階が確認されることが普通であるが、例えば、調査の後、最終居住段階の建物を修復すると決定した際には、それによって隠れる前段階の建物なら破壊したままでもよいのか、といった問題。
- 4) 正確な修復と保存には、そのための基礎となる調査期間も含め多くの時間と費用を有するが、その一方で、十分な事前調査が必要とされているにもかかわらず、早く遺跡を修復して観光資源として利用したいというようなその国独自の政治的な思惑との調整の問題。
- 5) 現在の日本の調査団システムでは、調査・修復を継続的に実施出来ない制約を抱えているのが普通である（ホンジュラスのエル・プエンテ遺跡の場合は、現地に長年居住する協力隊員で行ったという全くの異例である）。このような場合、翌年の調査再開時まで露出した部分の埋め戻し、ないしは壁面等の一時的な補強をする必要があり、2度でまになるばかりか多くの費用と警ら上の問題が生じるというような問題。
- 6) 現在における「修復・保存」という概念は、例えば遺跡公園の建設を考えた場合、以前のようにただ発掘した建造物を対象とするようなものから、遺跡を取り巻く自然環境を含めた全体を総合的に考察し、なるべく当時に近い形で復元し保存しようという方向に変わってきている。この場合、一考古学者の知識や経験には限度があり、他の分野の専門家との協同をどのように進めるのかというような問題などである。

また、マヤ遺跡の調査・修復においては、調査責任者と修復・保存責任者が異なるのが通例である。前者はマヤ考古学者であり、後者は修復専門家である。後者には考古学出身の者と建築学出身の者がいる。しかし、修復は調査結果に基づいて行うものであるため、考古学者といえども修復・保存に自分は無関係とは言えない立場に最初から置かれている。調査計画の立案においては後の修復・保存のことを勘案し、実際の調査過程においても、後の修復において必要となる図面や写真などの記録（これらは、しばしば考古学的な観点からは不必要なものが含まれる）を残しておくことが要求される。すなわち、調査の段階から考古学者は修復専門家と密接に連絡を保ちながら協同作業を行わなければならないのである。

さらに、修復・保存の段階に入っても、調査者にはその建造物の修復・保存に関する全体的な決定、すなわち、どのような形の修復にするのか、どのような保存を施すべきなのかといった決定を修復家とともに行う義務が課せられており、具体的な個々の修復プロセスにおいても、常に細部の決定を行うことが迫られるのである。例えば、マヤ遺跡の例でいえば、建造物のモールディングの出幅は何センチにするのか、1段目の基壇と2段目の基壇の幅はどのくらいにするのか、発掘によって出現した曲がりくねった基壇の角度をどのように設定するのか、モザイク状石彫は、どこにどのようなものがはめ込まれていたのか、崩壊した壁面はどこまで推定して復元・修復すべきか、といったような問題点である。つまり、マヤ遺跡の調査においては、常に考古学者（調査責任者）が修復上でも責任の一端を負う必要と義務が課せられているのである。

遺跡の修復と保存に関する次の段階の問題点は、現在筆者がラス・ピラスで直面しているものである。我々考古学者が調査した遺跡を現地側の意向に添う形で修復・保存する立場を所与としても、ラ・エントラダ考古学プロジェクトで修復・保存の対象としたエル・プエンテ遺跡の場合とは異なり（この遺跡中心グループはすでに国有地となり、遺跡公園となっている）、私有地で人里はなれた場所にある当該遺跡のような場合、修復された建造物を露出しそのままにしておく、いらぬ人目を引くことになり、かえって当該建造物ひいては遺跡全体の破壊や盗掘に繋がる恐れがあるという危険性である。さらにラス・ピラスの主要建造物の場合、96年の調査末期にその最下層に確認されたきわめて重要な遺構が未調査のまま残されており、将来的に調査を再開する場合、修復がその妨げにならないようにしなければならない。すなわち、修復された壁面を再度取り外そうとした場合に、壁面を壊さなければ発掘できないような修復・保存法では問題があるのである。ラス・ピラスの場合こういった事情を勘案し、現地の修復担当者や人類学歴史研究所の責任者とも相談した結果、窮余の策として修復された建造物を土中に保存する以下のような方法をとっている。

まず、これまでの発掘調査結果にもとづき建造物の修復を行なうが、壁面や部屋のベンチ等の遺構を補強する接着剤にはセメントを一切添加せず、粘土・砂・石灰・水だけを混ぜて作った接着剤で補強・修復する（通常は、エル・プエンテ遺跡で修復された建造物の場合のように、粘土2・砂1・石灰と水少量の全体量に対して、1.3～2.5%のセメントを添加する；Nakamura y Cruz 1994:627 参照）。さらにこうして原位置に戻され、補強・修復された建造物の基壇壁や上部構造の壁は、当該建造物からかつて崩壊し発掘過程で収集された詰め石を使って、外側を崩壊防止用の人工壁で覆われた。さらに主要部（漆喰をひかれたベンチなど）は保護のため砂を引きナイロンで覆い、その上から土をかぶせて埋め戻された。そして、再度上述した材質の接着剤で覆って補強し、雨水の浸透や浸食を防止した（ラス・ピラスの場合は、この処置に加え、96年の調査時に建造物全体にかけられた屋根を、支柱をとりかえて雨水を防ぐため当分の間維持している）。

この方法の一部は、コパンのラス・セプルトゥーラス区においてコパン・プロジェクト第二フェーズでも採用された方法である。こうして暫定修復された建造物を土中に保存しておくことにより、かりに将来的にホンジュラスがこの遺跡を遺跡公園として一般公開しようとする際には、修復された建造物の露出とセメントを使用した補強作業が極めて短期間でスムーズに行なわれるだけでなく、新たな調査を再開する場合にも、修復された壁面等を壊すことなく取り外しが可能となると期待される。

ラ・エントラダ地域における長年にわたる2次センターの調査・修復・保存事業は、こういった従来我が国では研究及び実施のノウハウがなかった「石造建造物」の修復と保存に関して、数多くの経験と知見を蓄積してきた。しかしながら、それらを習得した人材の多くが、すでに考古学を離れ、その知識や経験も散逸しようとしている。我が国の建築物は、基本的に「木造建造物」であり、その保存技術は世界的に見ても最高水準で歴史的にも多くの蓄積があるが、「石造建造物」の保存・修復技術やその実施のノウハウの蓄積には世界的に見ても遅れをとっているのが実情である。しかしながら、この研究会の会員がその調査・研究対象としている古代アメリカのほとんどの建物は「石造建造物」であり、その文化／文明を研究する会として、中米、南米を問わず遺跡の保存・修復に関する経験と知見、その実施のノウハウを積極的に交換・蓄積していくことが本会の将来活動に必要とされているのではなからうか。筆者はこの点を本会の将来活動への提言としたいと考えている⁷⁾。

註

1) 本稿は、1997年5月に古代アメリカ研究会（日本教育会館一ツ橋ホール）で発表された拙稿に加筆修正したものである。筆者の大学院における指導教官である埼玉大学の加藤泰建先生は、発表原稿の段階から拙稿を何度もお読み下さり貴重なご意見を頂きました。この場をお借りして深くお礼申しあげたいと思います。

2) 筆者は本稿において、*regional state* に対して「地方国家」という日本語訳を使用しているが、研究者によっては「広域国家」とか「地域国家」という日本語を与える場合もある。今のところ筆者は『ラテンアメリカ研究年報』第17号に出版した拙稿[中村1997]によって定義しているような意味でこの言葉を使用している。

3) これらをもう少し具体的にいえば、一例として、もしコパンの建造物22-Aが、ファーシュらが想定しているような「ポボル・ナ *popol nah*」だとすれば[B. Fash et al 1992]、そこに彫り刻まれた「9人の従属支配者とコパン王」という構図は、紀元8世紀後半におけるコパン国家の政治組織を反映したものであるはずである。仮に、これら従属支配者が身に付けている衣装や座っている文字を伴う人物図像が、ラス・ピラスのようなコパン谷外の2次センターで確認されれば、それは当時のコパンが広域的な地方国家を形成していたという仮説を支持する有力な証拠となりうるし、仮にそうでなければ、コパン国家の政治組織の規模はあくまでもコパン谷内に限定されていたと想定しようというような点である。この「ポボル・ナ」の仮説を最初に提唱したファーシュ夫妻も、現在リオ・アマリージョというコパンとラ・エントラダ地域のちょうど中間点に位置する2次センターの調査を行っているが、その目的の一つはこのような点の確認にあり、ラス・ピラスの調査もその解明に貢献しようのである。

4) 中心グループ内の最大広場Aにおける試掘及び平面発掘調査、広場Aの北側に位置する広場Cにおける試掘及び平面発掘調査、そして遺跡の中心グループ内で最大の建造物2番における平面発掘調査や同建造物の縦断トレンチ調査等である。そして、古典期後期以外の時代におけるこれまでの暫定的な成果としては、広場Cにおける先古典期中期の居住痕跡の確認と同時代の1次資料の回収、同じく広場Cにおける古典期前期の石列遺構の確認等がある。

5) 建造物2番で回収された石彫だけをとって見ても、すでに発掘以前にかなりの部分が散逸してしまっている。また、石彫は建造物2番とは無関係の発掘区域（例えば広場C）でも確認されている。これらの石彫は発掘区域周辺の建造物から崩壊したものであると思われる。こういった点を考慮した上でコパンのラス・セプトゥーラス区の発掘事例やこの数字から推定すると、中心グループの発掘を継続すれば、未だ数多くの石彫が回収可能であろうと筆者は想定している。

6) もちろん、建造物の最終居住段階を露出させることが目的の平面発掘の過程においても、本遺跡のように多量の石造彫刻品が崩れ石に混じった状況で、また崩壊し埋没したままの状況で確認されるような場合には、出土地点の正確な記録や取り上げ上の細心の注意が必要であることは言うまでもない。

7) ラス・ピラス遺跡の調査・修復・保存事業は、以下の民間財団や政府機関の資金援助により行われてきたことを記し感謝の意を表したいと思います。財団法人住友財団、財団法人トヨタ財団、国際交流基金、財団法人三菱財団、文部省、財団法人民族学振興会、ホンジュラス国立人類学歴史学研究所、国際協力事業団青年海外協力隊。また、現地調査やモニュメントの修復・保存に協力していただいている上山雅代、寺崎秀一郎、杓谷茂樹、バーバラ・ファーシュ、ウィリアム・ファーシュ、カール・タウベ、リカルド・アグールシア、アルマンド・オルティスの諸氏にもお礼申し上げます。また、筆者の大学時代の指導教官であるとともに現在私的な面において多大なご支援をいただいている城西国際大学貞末堯司先生、発表の機会を作っていただいた本会会長の東京大学大貫良夫先生、本稿の編集に御尽力頂いた関雄二先生、ラス・ピラスの図像解釈のため貴重な蔵書を快くお貸し頂いた植田覚先生にも深く感謝いたします。

参考文献

Chase, Arlen F., and Diane Z. Chase.

1996 More Than Kin and King: Centralized Political Organization among the Late Classic Maya. *Current Anthropology* 37 (5): 795-830.

Coe, Michael D.

1992 *Breaking the Maya Code*. Thames and Hudson, New York.

Demarest, Arthur A.

1992 Ideology in Ancient Maya Cultural Evolution: The Dynamics of Galactic Polities. In *Ideology and Pre-Columbian Civilizations*, edited by Arthur A. Demarest and Geoffrey W. Conrad. pp. 135-157. School of American Research Press, Santa Fe, New Mexico.

Fash, Barbara., William Fash, Sheree Lane, Rudy Larios, Linda Schele, Jeffrey Stomper, and David Stuart.

1992 Investigations of a Classic Maya Council House at Copan, Honduras. *Journal of Field Archaeology* 19 (4): 419-442.

Houston, Stephen D.

1989 [1996] *Maya Glyphs*. University of California Press, Berkeley and Los Angeles, California.
(『マヤ文字』植田覚 訳：学芸書林)

1993 *Hieroglyphs and History at Dos Pilas: Dynastic Polities of the Classic Maya*. University of Texas Press, Austin.

猪俣健、青山和夫

1996 「先産業社会における空間配置と経済効率原理—古典期マヤ社会についての中心地分析—」『民族学研究』61(3):370-392.

Marcus, Joyce.

1973 Territorial Organization of the Lowland Classic Maya. *Science* 180: 911-916.

1976 *Emblem and State in the Classic Maya Lowlands*. Dumbarton Oaks. Trustees for Harvard University, Washington, D.C.

1993 Ancient Maya Political Organization. In *Lowland Maya Civilization in the Eighth Century A.D.*,

- edited by J. A. Sabloff and J. S. Henderson. pp. 111-183. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- Martin, Simon., and Nikolai Grube.
 1995 Maya Superstates. *Archaeology* 48 (6): 41-46.
- Mathews, Peter.
 1991 Classic Maya Emblem Glyphs. In *Classic Maya Political History: Hieroglyphic and Archaeological Evidence*, edited by P. Culbert. pp. 19-29. Cambridge University Press, Cambridge.
- 中村誠一
 1996 「古代マヤ文明研究の現状と課題—コパンとその周辺地域を例として— (1), (2), (3), (4), (最終回)」 『考古学ジャーナル』 401:29-32; 402:37-42; 403:42-47; 405:23-28; 406:19-23.
 1997 「南東地域から見た古典期マヤ文明の崩壊」 『ラテンアメリカ研究年報』 17:157-188.
- Nakamura, Seiichi.
 1996 *Nuevas perspectivas sobre el área sureste maya: vistas desde la periferia de Copán*. Memoria presentada a la Fundación Toyota, Tokio.
- Nakamura, Seiichi., Takeshi Inomata, Masao Kinoshita, Masahiro Mikami, y Rie Takaichi.
 1985 *Informe de actividades del proyecto arqueológico La Entrada; abril a junio, 1985*. Instituto Hondureño de Antropología e Historia (IHAH), Tegucigalpa, D.C., Honduras.
- Nakamura, Seiichi., Kazuo Aoyama, y Eiji Uratsuji (eds.)
 1991 *Investigaciones arqueológicas en la región de La Entrada* III Tomos. Servicio de Voluntarios Japoneses para la Cooperación con el Extranjero (JOCV) e IHAH, San Pedro Sula, Honduras.
- Nakamura, Seiichi., y Daniel Cruz.
 1994 Investigaciones arqueológicas y trabajos de restauración en el sitio arqueológico El Puente, Copán, Honduras. En *VII Simposio de investigaciones arqueológicas en Guatemala, 1993*, editados por Juan Pedro Laporte y Hector L. Escobedo, pp. 621-631. Instituto de Antropología e Historia y Asociación Tikal, Guatemala.
- Schele, Linda.
 1989 The Inscriptions of La Entrada Region, Honduras. En *Investigaciones arqueológicas en la región de La Entrada*. Tomo II (1991), editados por S. Nakamura et al. pp. 209-217. JOCV e IHAH, San Pedro Sula, Honduras.
- Schele, Linda., and Matthew Looper.
 1996 *The Proceedings of the Maya Hieroglyphic Workshop: Copan and Quirigua*. March 9-10, 1996, University of Texas, Austin.
- Schortman, Edward M., and Seiichi Nakamura.
 1991 A Crisis of Identity: Late Classic Competition and Interaction on the Southeast Maya Periphery. *Latin American Antiquity* 2 (4): 311-336.
- Sharer, Robert J.
 1990 *Quirigua: A Classic Maya Center and Its Sculptures*. Carolina Academic Press, Durham, North Carolina.
- Stuart, David.

1985 The 'Count-of-Captives' Epithet in Classic Maya Writing. In *Fifth Palenque Round Table, 1983* Vol. VII, edited by Merle Greene Robertson (General Editor) and Virginia M. Fields (Volume Editor). pp. 97-101. Pre-Columbian Art Research Institute, San Francisco.

Thompson, J. Eric S.

1962 *A Catalog of Maya Hieroglyphs*. University of Oklahoma Press, Norman.